

三加和町文化財調査報告 第3集

田中城跡

Ⅲ

1989

三加和町教育委員会

三加和町文化財調査報告 第3集

田中城跡

Ⅲ

1989

三加和町教育委員会

序

三加和町教育委員会では、県指定史跡田中城跡の発掘調査を国・県の補助を受けて、昭和61年度から5ヶ年計画で実施しています。

本年度は3年目にあたり、田中城本丸跡の東側700㎡を調査いたしました。調査の結果は、建物等の遺構は確認できませんでしたが、今までになく鎧の小札・冑の前立などの金属製品、土製の猿など多数の遺物が出土しました。

これら出土品は、輸入磁器や日常の生活用品などが主たるもので、先人の生活の証しであります。よって、記録に留めておくべく本調査報告書を作成する運びとなりました。

本書の作成にあたっては、県文化課・県立美術館のご指導をあおぎながら、担当の黒田裕司学芸員がまとめました。改めて感謝とお礼を申し上げ、今後ともご指導の程をお願い申し上げます。

最後に、今後も田中城跡の調査を継続し、本町の貴重な歴史的遺産の保存と活用を図ってまいる計画でございます。皆様方の一層のご指導とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成元年3月31日

三加和町教育長 蒲池 龍一郎

例 言

1. 本書は、熊本県玉名郡三加和町が「田中城総合整備計画」の一環として、昭和63年度に実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 本調査は、国庫補助事業として三加和町教育委員会が実施し、黒田裕司がその任にあたった。
3. 遺物の実測は、黒田・浦田信智（熊本県文化課嘱託）が、遺物及び遺構の整図は黒田が行なった。また、拓本は笠間いつ子が行なった。
4. 調査時の写真撮影は黒田が、整理時の写真撮影及び焼き付けは浦田が行なった。
5. 遺物に関しては、阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）・大田幸博（熊本県文化課文化財保護主事）両氏の御教示を得た。
6. 本書で使用した遺構の略記号は次の通りである。

S K—土塼、S X—不定形土塼、S D—溝状遺構、P—柱穴。

A—B、C—Dは、断面実測の基準。
7. 出土遺物は、三加和町教育委員会で保管している。
8. 題字は山下保幸氏による。
9. 本書の執筆・編集は黒田が担当した。

本文目次

第Ⅰ章 序説	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査組織	1
第3節 調査経過	2
第Ⅱ章 調査の成果	4
第1節 調査の概要	4
第2節 遺構と遺物	4
(1) 1号土塼	4
遺物	4
(2) 1～3号不定形土塼	5
1号不定形土塼出土遺物	5
2号不定形土塼出土遺物	9
3号不定形土塼出土遺物	12
(3) 4号不定形土塼	14
遺物	14
(4) 5号不定形土塼	16
遺物	16
(5) 7号不定形土塼出土遺物	17
(6) 1号溝状遺構	17
遺物	17
(7) 2号溝状遺構	18
(8) 遺構に伴わない遺物	18
第Ⅲ章 まとめ	20

挿図目次

第1図 遺構配置図	3
第2図 1号土塼実測図	5
第3図 1号土塼出土遺物実測図	6
第4図 1号不定形土塼実測図	7
第5図 1号不定形土塼出土遺物実測図	8

第6図	2号不定形土壌実測図	10
第7図	2号不定形土壌出土遺物実測図	11
第8図	2号不定形土壌Pit内出土遺物実測図	12
第9図	3号不定形土壌出土遺物実測図	12
第10図	3号不定形土壌実測図	13
第11図	4号不定形土壌実測図	14
第12図	4号不定形土壌出土遺物実測図	15
第13図	5号不定形土壌実測図	16
第14図	5号不定形土壌出土遺物実測図	17
第15図	7号不定形土壌出土遺物実測図	18
第16図	1号溝状遺構出土遺物実測図	18
第17図	遺構に伴わない遺物実測図	18
第18図	2号溝状遺構断面実測図	19

写真図版目次

図版1	(1)遠景（和仁川より臨む）	(2)遠景（北西より）
図版2	(1)遺構検出状態（南西より）	(2)遺構検出状態（北より）
	(3)SK-01検出状態	(4)SX-06～08検出状態
	(5)SX-01～03	(6)SK-01遺物出土状態
	(7)SK-01 青磁出土状態	
図版3	(1)SX-02 土製猿出土状態	(2)SX-02 韓出土状態
	(3)SX-02 鉄砲玉出土状態	(4)SX-01 土師質土器出土状態
	(5)SX-01	(6)SX-01 遺物出土状態
	(7)SX-07	(8)SX-07 遺物出土状態
図版4	(1)SX-04	(2)SX-04 播鉢出土状態
	(3)SX-04 鎧の小札出土状態	(4)SX-04 冑の前立・鎧の小札出土状態
	(5)SX-04 刀子出土状態	(6)SX-05 染付碗出土状態
	(7)ペンダント状石器出土状態	(8)青磁出土状態
図版5	出土遺物	
図版6	出土遺物	
図版7	出土遺物	

第Ⅰ章 序 説

第1節 調査に至る経過

三加和町では、熊本県が提唱している日本一づくり運動の一環として、田中城周辺の環境整備及び公園化を目指している。その前段階として、遺構の確認を行なう目的で昭和59年に試掘調査を行ない、その成果をもとに昭和61年度から5ヶ年計画で国庫補助を受け、発掘調査を行なうことになった。

昭和61・62年度の2ヶ年で主郭部分の調査を終わり、遺構として14棟の掘立柱建物跡のほか、土城・溝遺構などを検出。遺物としては青磁・染付などの輸入磁器、鐏鉢・火舎・土師質土器などの生活用具、多数の土錘などが出土した。また、弥生時代後期の竪穴住居跡2基も検出され、高坏・脚台付の甕なども出土。古くからこの台地が生活の場として利用されていたことが確認された。

このような経過を経て、今年度は主郭部の1～1.5m下段に設けられた曲輪の一部(五筆の畑に分かれているうちの東側のもの)約700㎡を調査することになった。標高は約102.3mである。

第2節 調査組織

- | | |
|-------|---|
| 調査主体 | 三加和町教育委員会 |
| 調査責任者 | 蒲池龍一郎（三加和町教育長） |
| 調査事務 | 牛島 茂生（社会教育課々長）
藤木 住人（社会教育課々長補佐）
高木洋一郎（社会教育課主事） |
| 調査員 | 黒田 裕司 |
| 専門調査員 | 石井 進（東京大学文学部教授）
大三輪龍彦（鶴見大学文学部教授）
原口 長之（熊本県文化財保護審議員）
田辺 哲夫（日本考古学協会員）
白木原和美（熊本大学文学部教授）
工藤 敬一（熊本大学文学部教授）
北野 隆（熊本大学工学部教授）
阿蘇品保夫（熊本県立美術館主幹）
大田 幸博（熊本県文化課文化財保護主事） |

発掘作業員 福原 忍・福原スミ子・福原 艶子・福原 房子・轟 浅代
協力者 江崎 正（熊本県文化課々長）・隈 昭志（熊本県文化課々長補佐）・西
澤 八朗（熊本県文化課参事）・浦田 信智（熊本県文化課嘱託）・中村幸史郎（山鹿市立
博物館）・笠間イツ子・福原 宗茂（三加和町議会議員・地権者）・田中城保存会

第3節 調査経過

8月1日 重機による表土剥ぎ開始。

8月3日～12日 主郭部分の整地。

8月15日～29日 表土剥ぎ。

晴天続きで、昨年と同様散水しながらの調査となる。青磁・火舎片など若干出土。遺構は焼土の集中部分が認められるだけで、柱穴もわずかし確認できない。

8月26日 「三加和町史」編集委員視察。

8月30日～10月6日 遺構検出。

焼土の集中部分がいくつか確認される。長方形プランの土壇（1.93m×0.88m）1基確認。地山が西側3分の1ぐらいしか確認されず、東側は整地された可能性がある。遺物は増えてきたが、昨年に比べるとかなり少ないようだ。

10月5日 鈴木健二熊本県立劇場館長視察。

10月7日～8日 遺構・遺物写真撮影。

10月11日～13日 専門調査員視察。

10月13日 石井・大三輪教授講演会。

10月14日～11月14日 遺構発掘。

遺構ラインが確認しにくいので、焼土集中部分から掘り始める。

10月19日 土製の猿・鉄製品などが出土。遺物の量も増えてくる。

10月25日～ 土壇・不定形土壇など実測（1/10）。

10月29日 鉄砲玉出土。

10月31日 網野善彦神奈川大短大学部教授視察。

11月7日 長崎県長与町議会議員視察。

11月18日～12月5日 遣り方を組んでの遺構実測（1/20）。

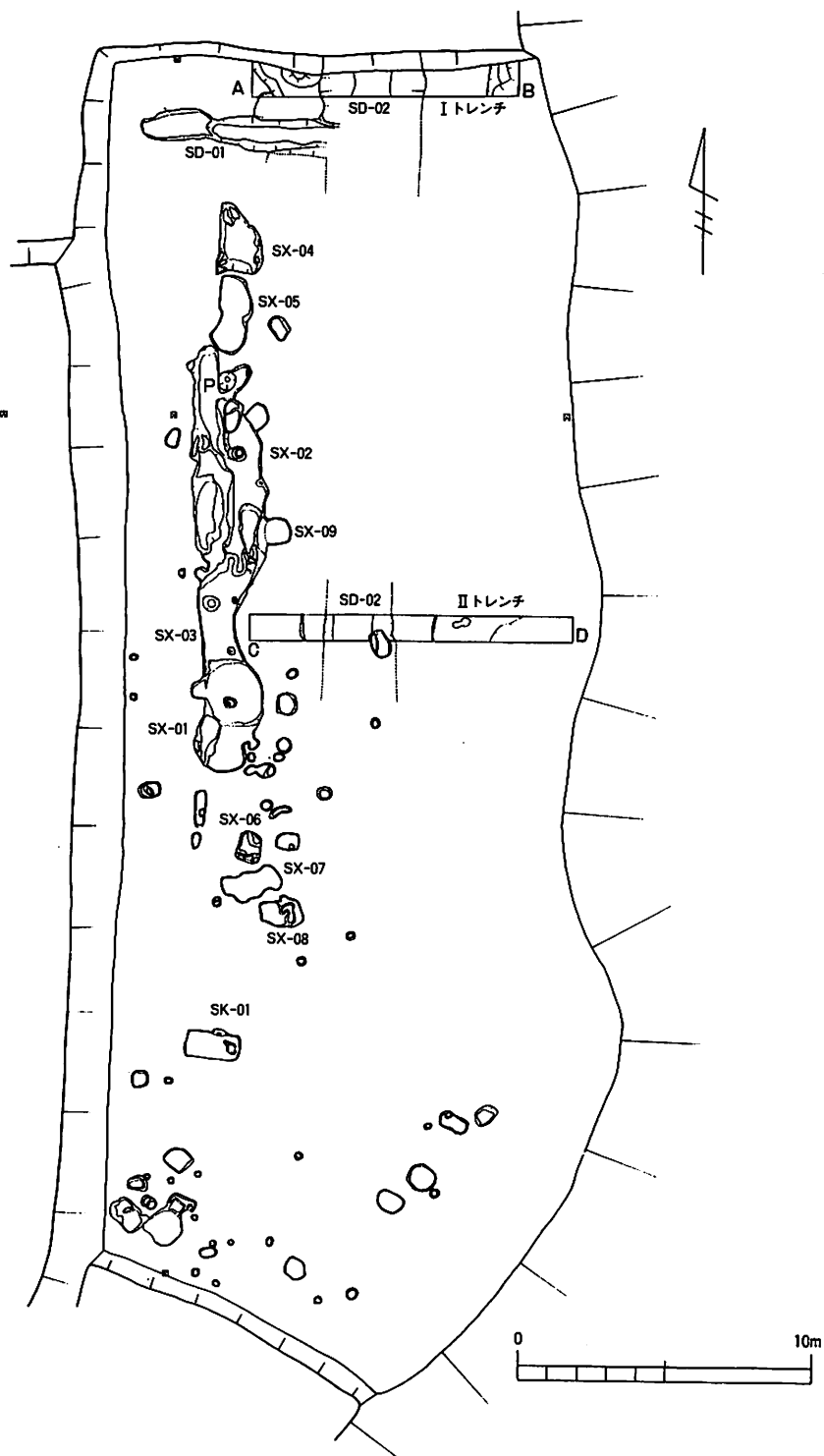
11月25日 球磨郡深田村々長・議会議員等視察。

12月6日～28日 地山の落ち込みラインの確認・実測。

調査区の北端で確認トレンチをいれたところ、幅1.78m、深さ0.6mの空堀と思われる遺構を検出。中央部にもう1本トレンチをいれ、この遺構の延び具合をみてみると幅1.70m、深さ0.4

mと次第に小さくなっており、空堀というよりは溝状遺構としておいた方がよいと思われた。

平成元年1月12日 宮崎県佐土原町議会議員等視察。



第1図 遺構配置図

第Ⅱ章 調査の成果

第1節 調査の概要

主郭の1～1.5m 下方、西側を除く三方に巡らされた曲輪が現在は5筆の畑に分かれている。今年度は、そのうちの東側の1筆、約700㎡の調査を行なった。

以前、南側に隣接する畑を開墾中、多量の焼米・石臼などが出土したことを聞き、今回の調査区がその畑と続いていることでもあり、倉庫群でも確認できるのではないかという予想のもとに調査にとりかかった。しかし、調査の結果土壌1基・焼土が多量につまった不定形土壌などが検出されたが、掘立柱建物跡などは確認することができなかった。

出土遺物は青磁・白磁・染付碗などの輸入品をはじめ、土師質土器・播鉢・火舎のほか、鎧の小札・冑の前立・刀子などの鉄製品、鉛製の鉄砲玉、硯・石臼などの石製品、猿を形どった土製品などバラエティーにとんでいる。

また、調査終了間際に地山の落ち込みラインを確認したところ、下方より溝遺構が検出された。今回の調査の遺構確認面は、この溝を埋めて整地したあとに形成されているものと思われ、二つの時期があったことが推測される。

第2節 遺構と遺物

(1)1号土壌 (SK-01) (第2図)

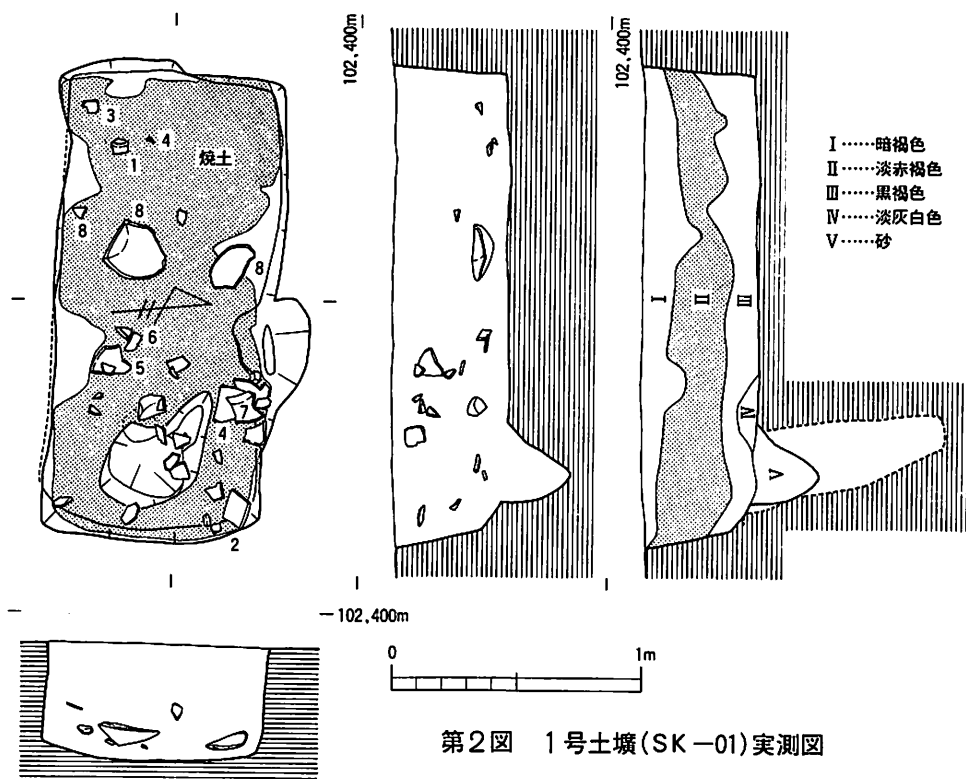
長径1.93m、短径0.88m、深さ0.47mの長方形プランで、長軸をほぼ東西方向にとる。平面プランを確認した際、ほぼ全面に焼土がみられ、掘り進むとその下方にガチガチに固くしまった焼土層が約20cm確認された。また、西側には底面からさらに深さ0.75mのピットも検出されたが、内部は砂が詰まっており、このピットが土壌に伴うものかどうかは断定できない。

遺物は、青磁・播鉢・蔵骨器などが全体に散在して出土した。

○遺物 (第3図)

1は削り出しの高台をもつ青磁の坏で、口径11.6cm、器高3.1cm、底径6.9cmを測る。全体に釉がうすくかかり、内・外面ともに青白色を呈し、胎土は非常に緻密で焼成も良好である。高台部・畳付部及び底面内側の釉は、焼成時に解けだし、表面が盛りあがり、きたなくなっている。内・外面に貫入がみられる。

2・3は土師質土器。2は器高1.9cmの小皿で、底部よりやや内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。底部は糸切り底で、底部と体部との境は丸味を帯びており、はっきりしない。3は器高3.9cmで底部から急角度で体部が立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は面取りしており平らである。坏と思われるが底部がやや角ばっており、全体的な感じは今までのものと趣が異なる。



第2図 1号土壌(SK-01)実測図

4は瓦質の火舎で口径48.2cmを測る。断面三角形の突帯が3条残り、口縁部と1本目の突帯間に×の刻印を押し、径約1cmのボタン状の粘土を貼りつけている。

5～7は瓦質の播鉢。5は口径30.2cm、器高13.2cm、底径17.2cm、6は底径14.0cm、現存高3.5cm、7は底径15.4cm、現存高10.0cmを測る。5・7は8本単位、6は7本単位の条線を施している。

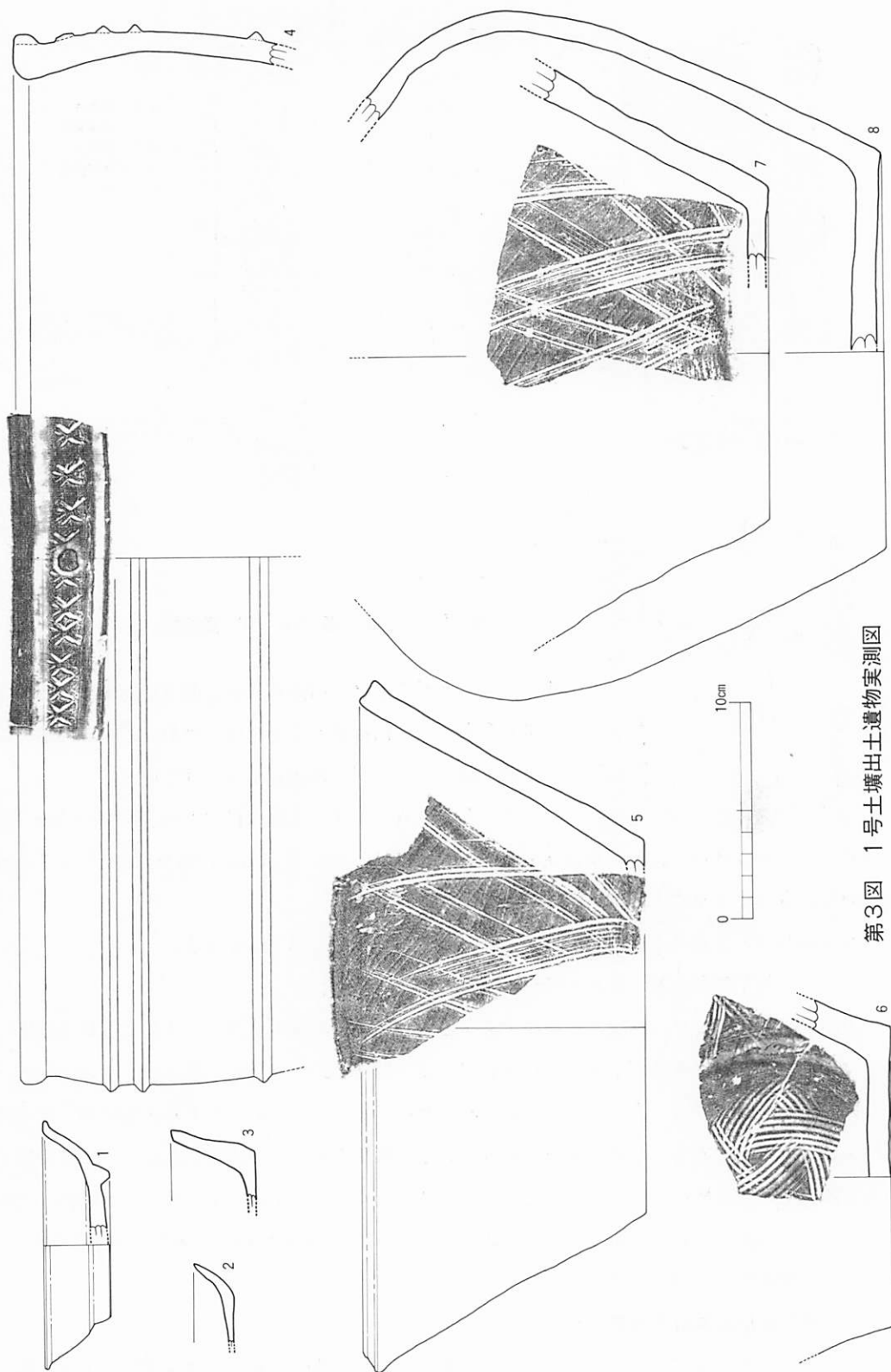
8は蔵骨器と思われる須恵質土器で、底径18.5cm、現存高23.8cmを測る。

(2) 1～3号不定形土壌(SX-01～03) (第4・6・10図)

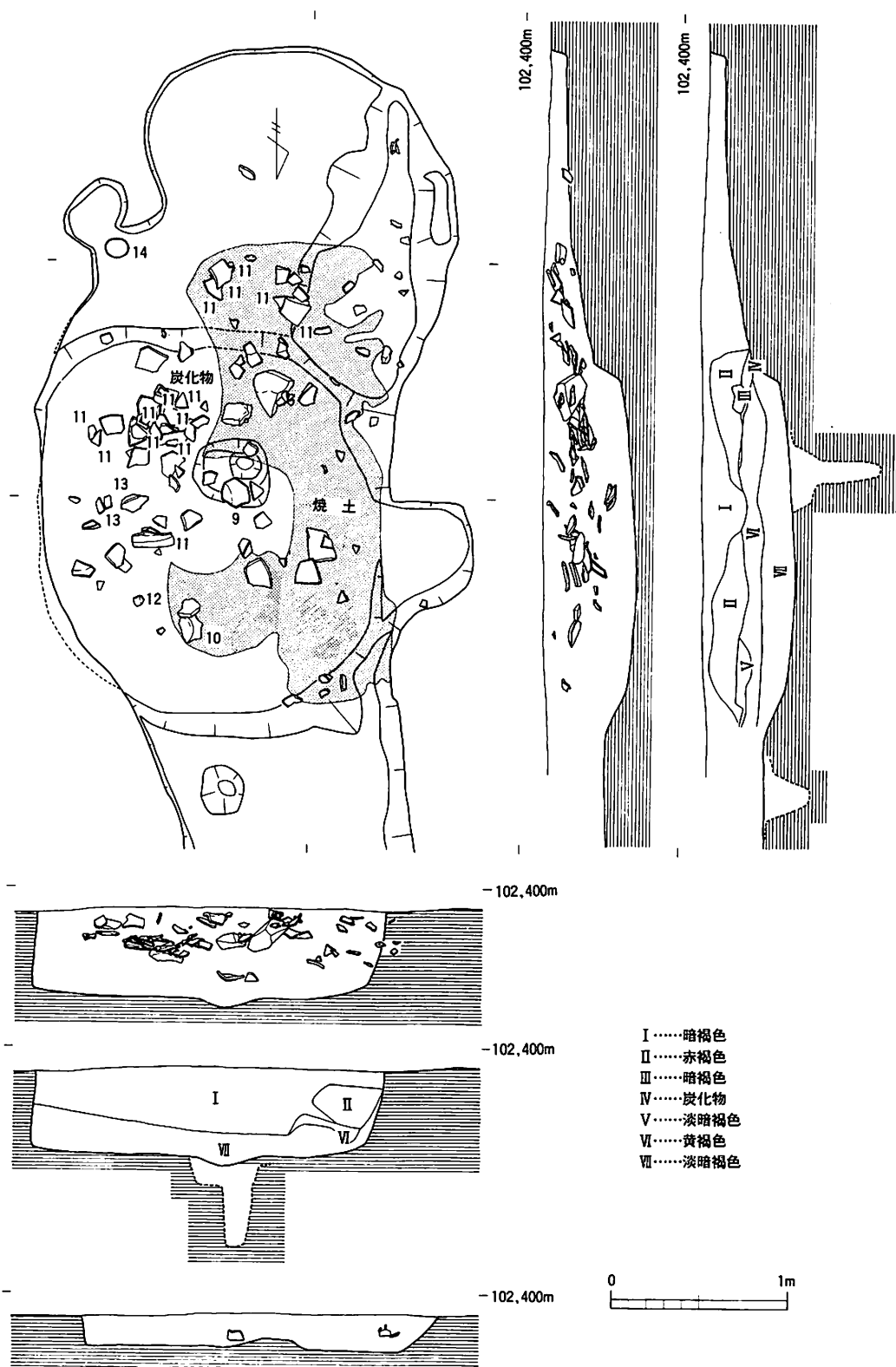
遺構確認段階ではプラン検出が困難であったため、焼土の集中域で1～3号に分けて発掘にとりかかったが、掘り終えてみると長径約14.5m、短径約1.2～2.6m、深さ約0.3～0.5mの一つの土壌となってしまった。長軸は南北方向にとる。掘り下げていくと1号土壌同様、厚さ約20cmのガチガチに固まった焼土層が現われ、底面に数個のピットが確認された。いずれの埋土も土壌のものとは異なり、非常に柔らかくサクサクとしている。1号土壌のピットと同様、土壌に伴うものかどうかは断定できない。北側のピットは径0.6×0.65m、深さ2.20mと大きく、埋土には遺物や炭化物が多量に含まれていた。

○1号不定形土壌出土遺物 (第5図)

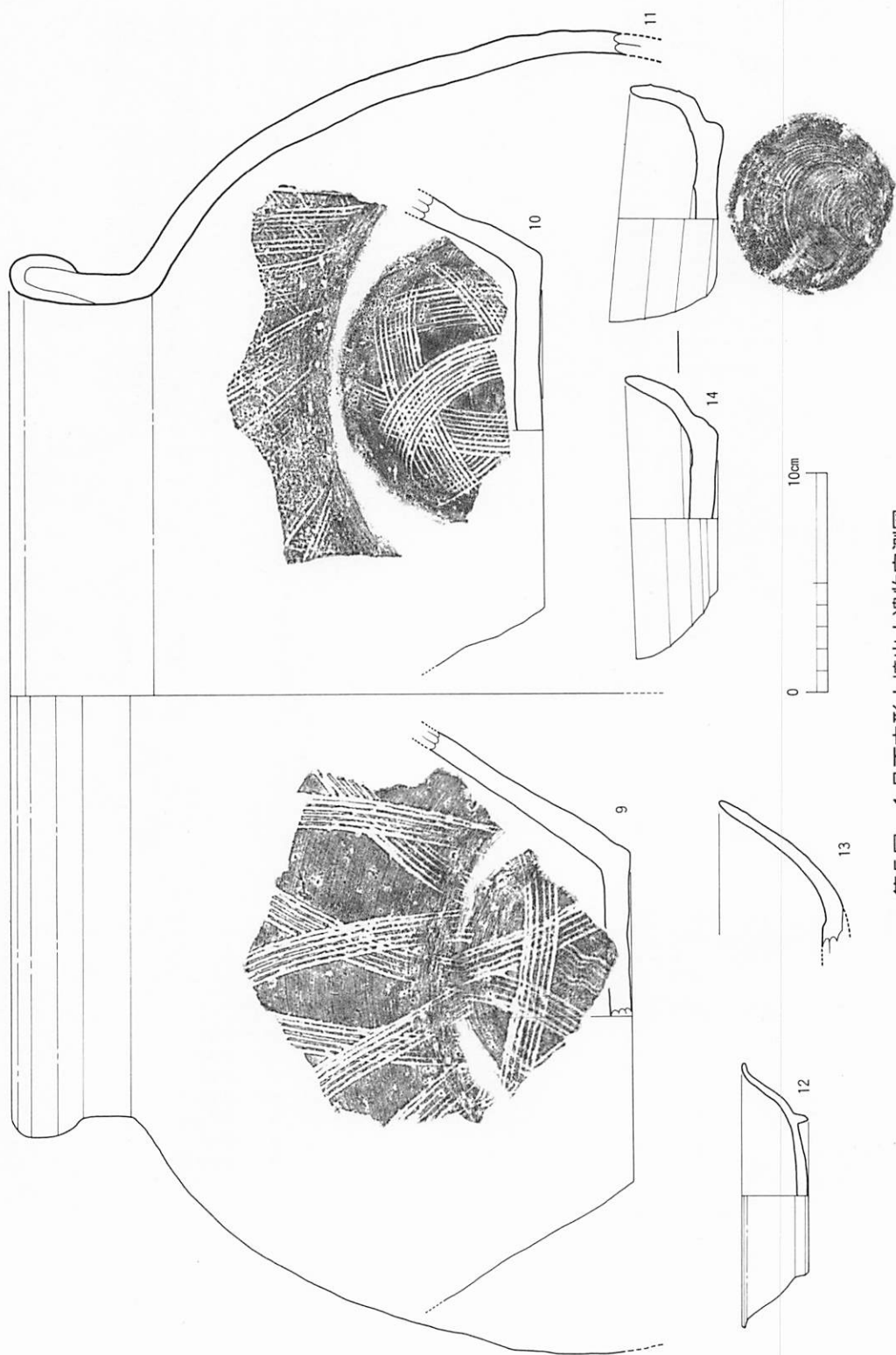
9・10は瓦質の播鉢でいずれも底部から体部にかけての破片である。9は底径15.0cm、現存



第3図 1号土坑出土物実測図



第4图 1号不定形土壤(SX-01)实测图



第5図 1号不定形土坑出土遺物実測図

高8.8cmで6本単位の条線を、10は底径16.0cm、現存高5.0cmで9本単位の条線を施している。

11は備前の大甕で、口径38.4cmを測る。玉縁状の口縁を呈し、胎土には小礫を多量に含む。61・62年度に出土したものと接合しており、かなり広範囲に破片が散在しているものと思われる、同一個体と思われる底部も出土している。

12は削り出し高台をもつ白磁の坏で、口径12.2cm、器高3.1cm、底径7.0cmを測る。畳付の外側の一部を除いて釉がかかり、やや灰色を帯びた乳白色を呈している。胎土は緻密で焼土は良好。高台の畳付部分は三角形にとがっている。

13は青磁の碗。内・外面とも淡緑青色。内面はていねいな調整が施されているが、外面は焼成の際にできたと思われる小さな穴が多数あいている。

14は土師質の坏で、長径12.9cm、短径10.7cm、器高3.7～5.0cm、底径7.3cmを測る。器形は歪曲しており、底部から体部への曲がり部では段をもつ。また外面にはロクロ整形の際の稜が残っている。糸切り底。

○2号不定形土壇出土遺物（第7・8図）

15～19は瓦質の火舎である。口径がわかるのは15だけで、34.2cmを測る。いずれも断面三角形の突帯をもち、口縁と突帯の間に15～17は花文、18・19は※文を刻印している。花文・※文とも、それぞれ異なった模様である。さらに、15にはボタン状の粘土を貼りつけ、突帯の下方には6本単位のクシ状工具による流水文が施文されている。

20・21は瓦質の播鉢である。20は8本単位の条線が施されており、よく使い込まれていて磨滅している。21は9本単位の条線で、外面には指頭調整痕が残っている。

22は瓦質と思われる坏で、器高3.85cmを測る。底部から急角度で体部が立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は面取りしてあり平らで、平面形は楕円形であろうと思われる。

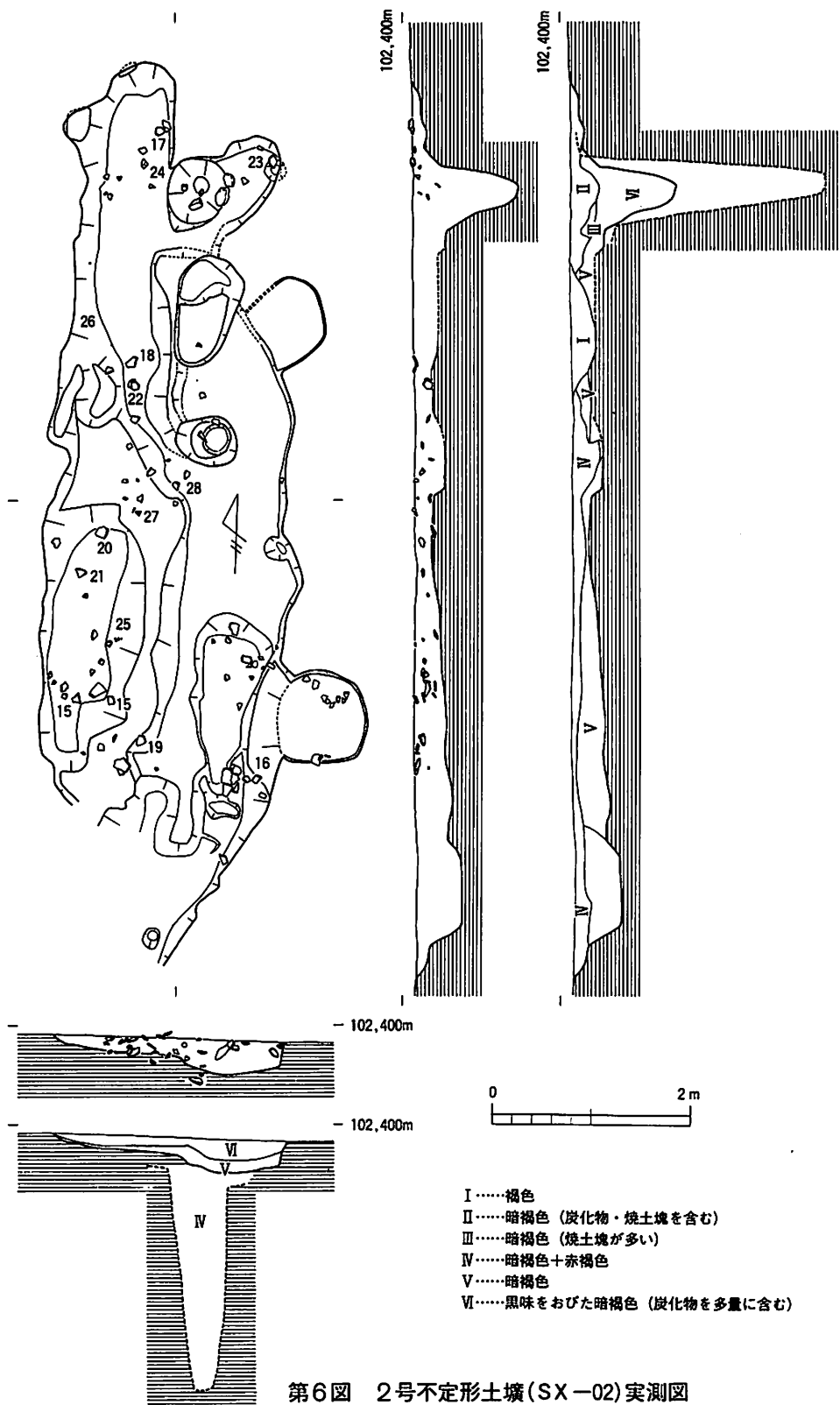
23・24は土師質土器である。23は口径22.9cm、器高4.7cm、底径12.5cmの坏である。底部は糸切り底で、やや上げ底気味。底部と体部との境ははっきりしており、体部はやや外傾気味に立ち上がり口縁部に至る。24は器高2.6cmの皿である。底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。器厚は他の土師質土器よりやや厚く、底部は糸切り底。

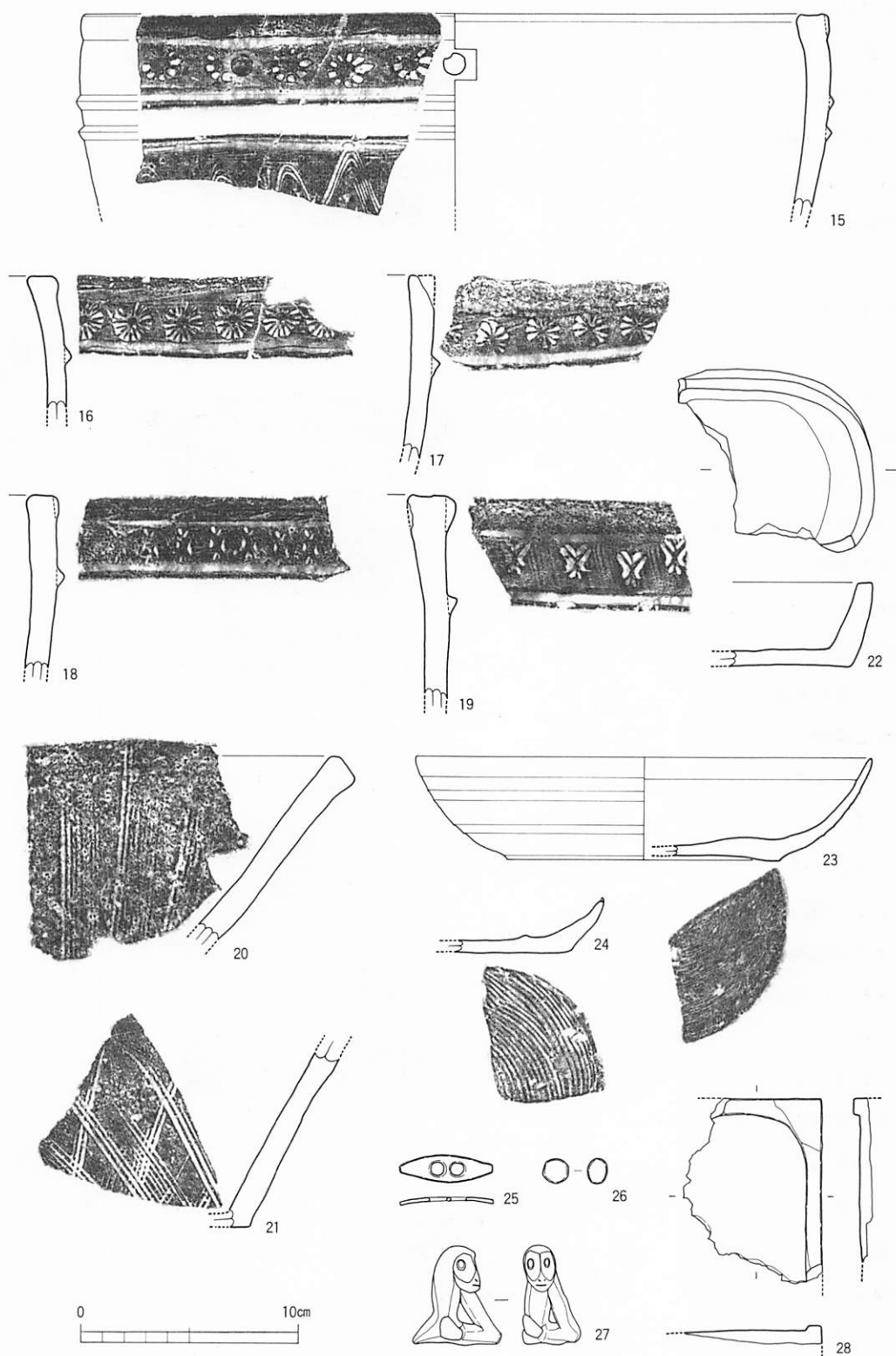
25は真鍮製と思われる鎧等の^{JE1}鞆で、長径4.3cm、短径1.3cm、厚さ0.2cmを測る。径0.7cmの紐穴が2個穿けられている。

26は鉛製の鉄砲玉である。^{JE2}径0.9～1.15cmとややつぶれた感じがする。重さ6.30g。球磨地方の中世城で出土した玉とほぼ同じ大きさである。^{JE3}

27は猿を形取った土製品である。器高4.5cmで足が一部欠損している。目を竹管様のものにつけ、鼻・口をヘラで描いており、非常に具体的な表現をしている。土馬と同じような性格をもつものであろうか？

28は硯である。裏側がかなり剥がれており、厚さは不明であるが、全体の4分の1程度が残





第7図 2号不定形土塊出土遺物実測図

っていると思われる。

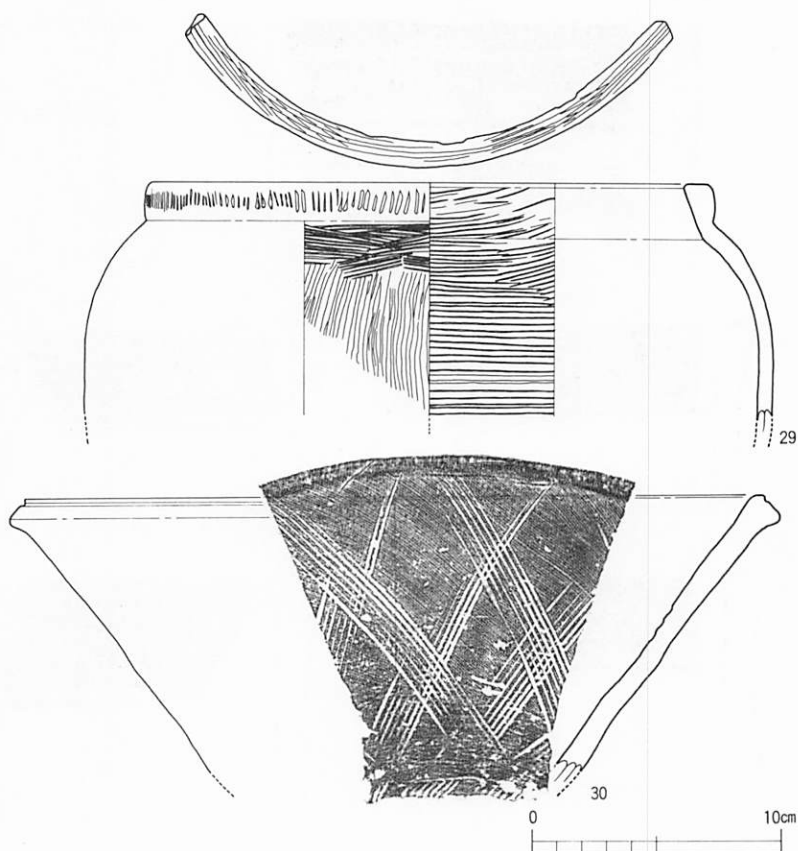
29・30は北側のピットからの出土遺物である。29は瓦質の壺で、口径22.2cm、現存高9.3cmを測る。口唇部をはじめ、内外面ともヘラ調整痕がはっきりと残っている。30は瓦質の播鉢で、口径31.0cm、現存高11.1cmを測る。口唇部に、浅い沈線を1本めぐらし、内面には7本単位の条線が施されている。

○3号不定形土壌出土遺物 (第9図)

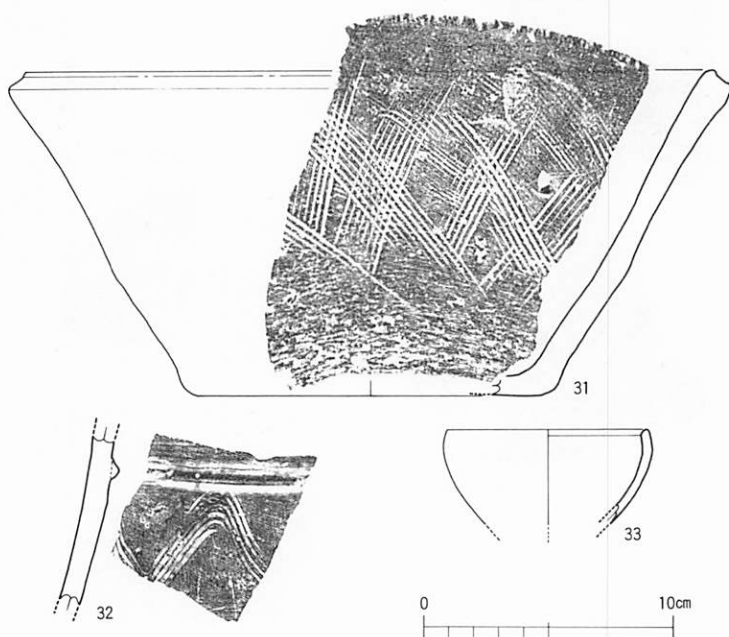
31は瓦質の播鉢で口径27.6cm、器高13.0cm、底径13.8cmを測る。内面には8本単位の条線を施し、外部には指頭調整痕が残っている。

32は瓦質の火舎の胴部片である。断面三角形の突帯の下方に6本単位のクシ状工具による流水文が施文されている。

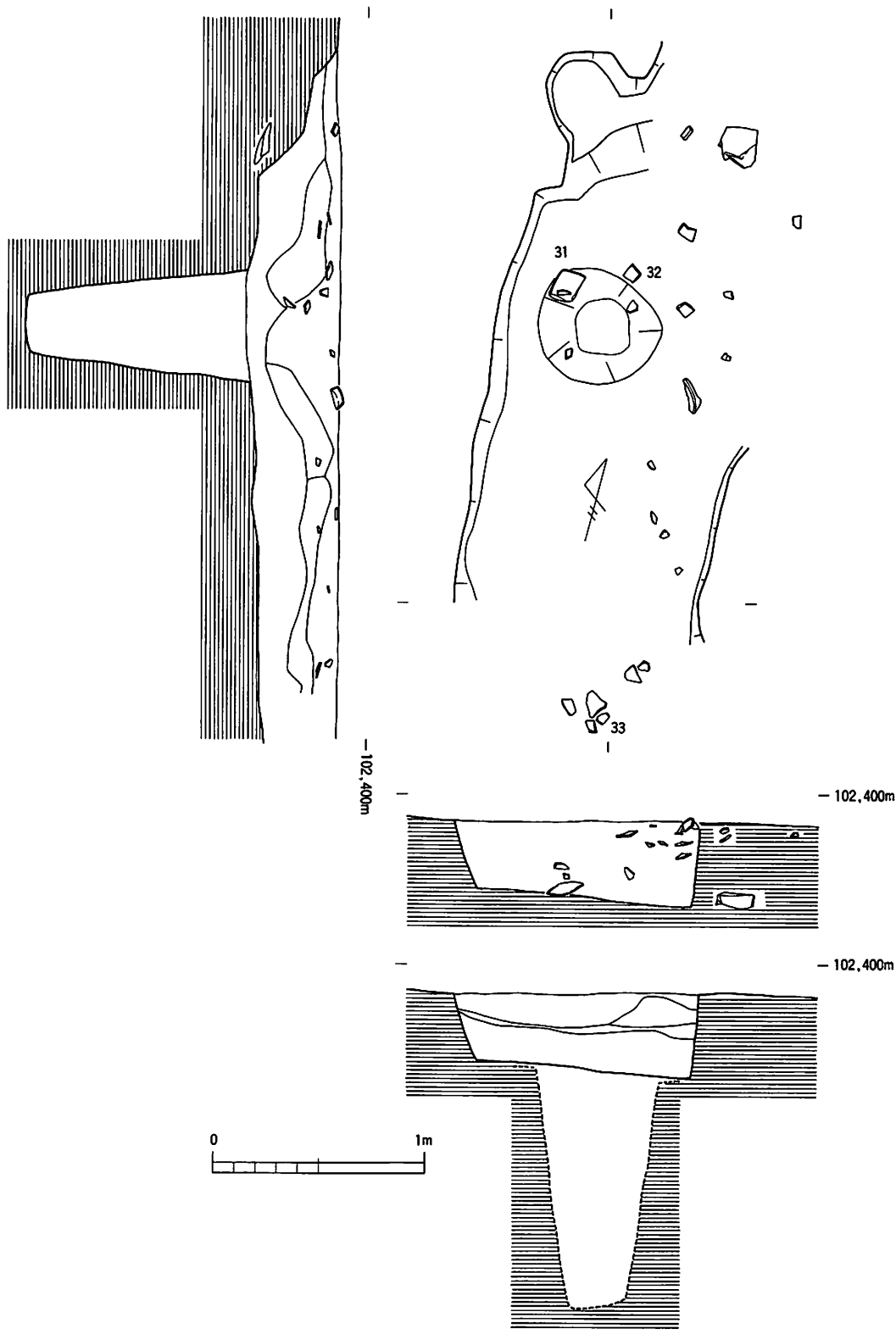
33は土師質の小型壺で、口径8.0cm、



第8図 2号不定形土壌 Pit内出土遺物実測図



第9図 3号不定形土壌出土遺物実測図



第10図 3号不定形土壇(SX-03)実測図

現存高3.8cmを測る。

註1 「史跡 山中城跡」 三島市教育委員会 1985年。

註2 註1と同じ。井上流近要集による玉割表では二匁五分玉にあたり、銃口径は11.7
90ミリとなっている。

註3 「奥野城跡」 熊本県教育委員会 1987。

「高城跡」 熊本県教育委員会 1988。

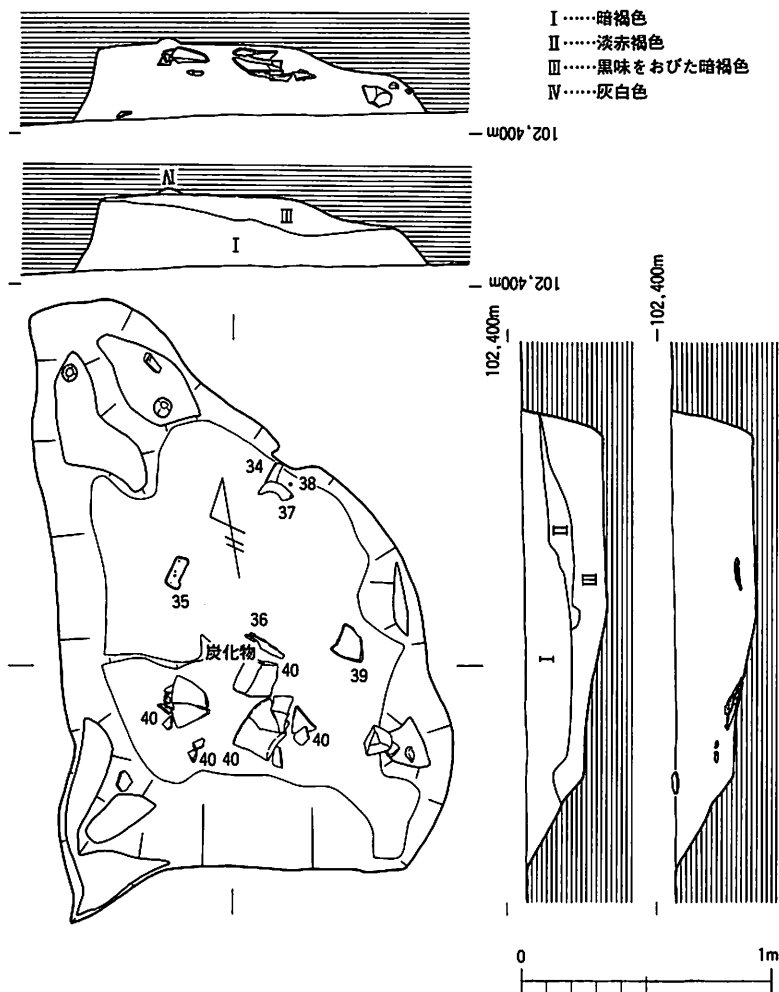
(3)4号不定形土壌(SX-04)(第11図)

東西約1.50m、南北約2.00m、深さ約0.35mの三角形に近い形状を呈している。1～3号不定形土壌のように、ガチガチの焼土層は認められなかったが、底の方に炭化物が多量に含まれていた。

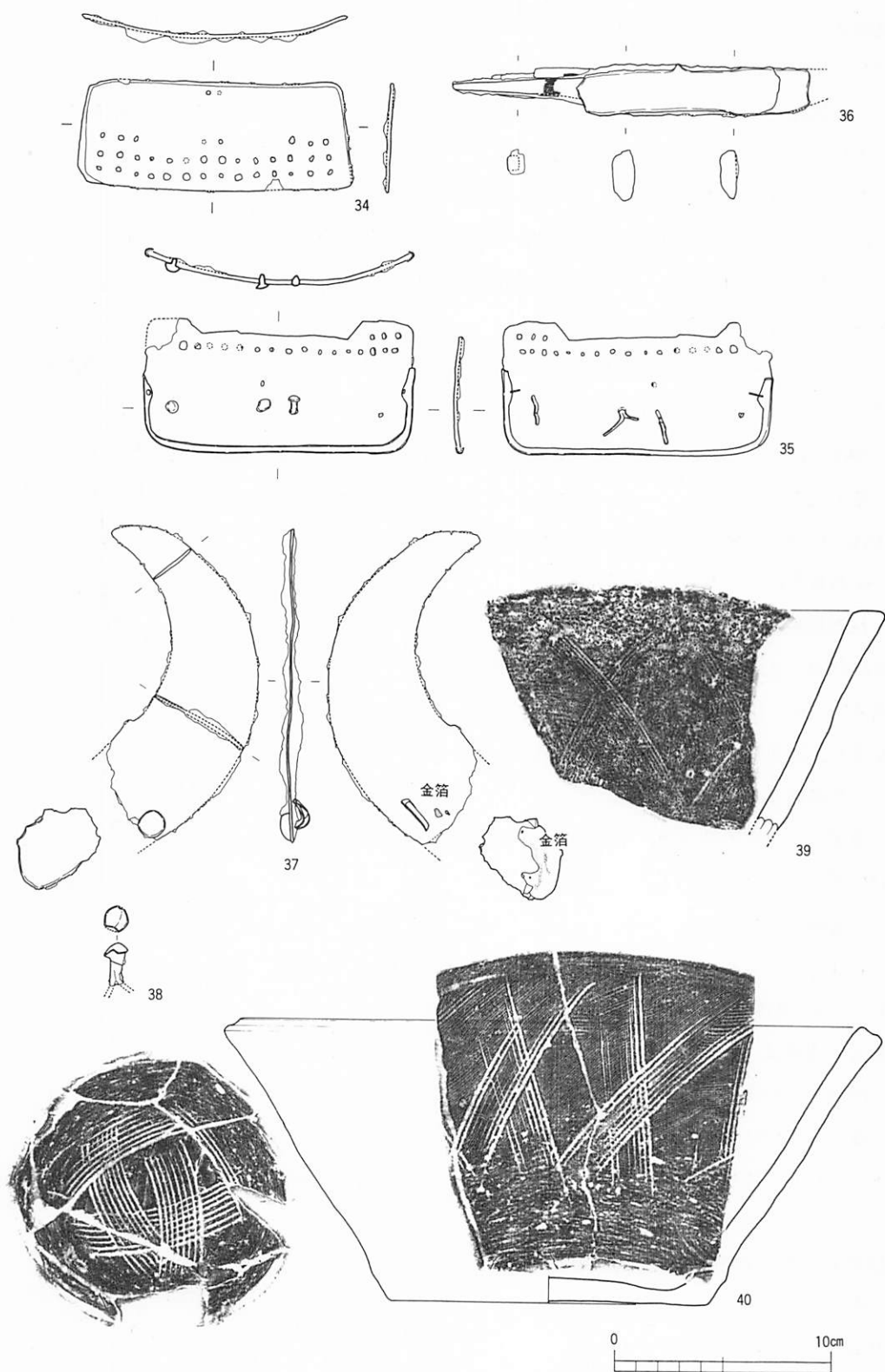
遺物は鉄製品(鎧の小札、冑の前立、刀子など)と播鉢などが出土。

○遺物、(第12図)

34・35は鎧の小札である。34は5.0×11.4～12.7cm、厚さ1mmの中央上部に2個の孔をあけ、下部には左から3段×3列、2段×3列、3段×2列、2段×3列、3段×3列と多数の孔があけられている。周囲に段を設けることにより縁取りとしている。35は6.1×12.5cm、厚さ1.5mmの鉄板で、三方を真鍮で縁取りしており、真鍮の線で鉄板に結びつけている。さらに、4本の真鍮製の鉾が残っており、これらで別の小札とつないでいたと思われる。この2枚の小



第11図 4号不定形土壌(SX-04)実測図



第12図 4号不定形土塊出土遺物実測図

札は大きさからいって同一個体と思われる、35の方が真鍮の縁取りがあるところから、一番下の部分と推測される。

36は残存長16.5cmの刀子である。約6.0cmの茎があり、切先部分は欠損している。柄の部分には木片が残っており、また、刀身部分にもサヤと思われるふくらみが残っているが、サビ化が激しく確認は困難である。

37は冑の前立と思われる。発掘の際、破損してしまい全体の形がわからないのは残念であるが、三日月状の前立であったと推測される。冑本体には2本の鉄で留められていたと思われる、裏面には部分的に金箔が残っている。

38は37を留めていたと思われる鉄である。鉄の頭は径1.2cm、現存高2.0cmで、脚の部分は二股に分かれているが先端部分は欠損している。

39は土師質、40は須恵質の播鉢である。39の内面には6～7本の条線が施されているが、よく使い込まれて磨滅している。40は完形品で、口径28.4cm、器高15.0cm、底径14.8cmを測る。体部・底部の内面には8本単位の条線を施している。

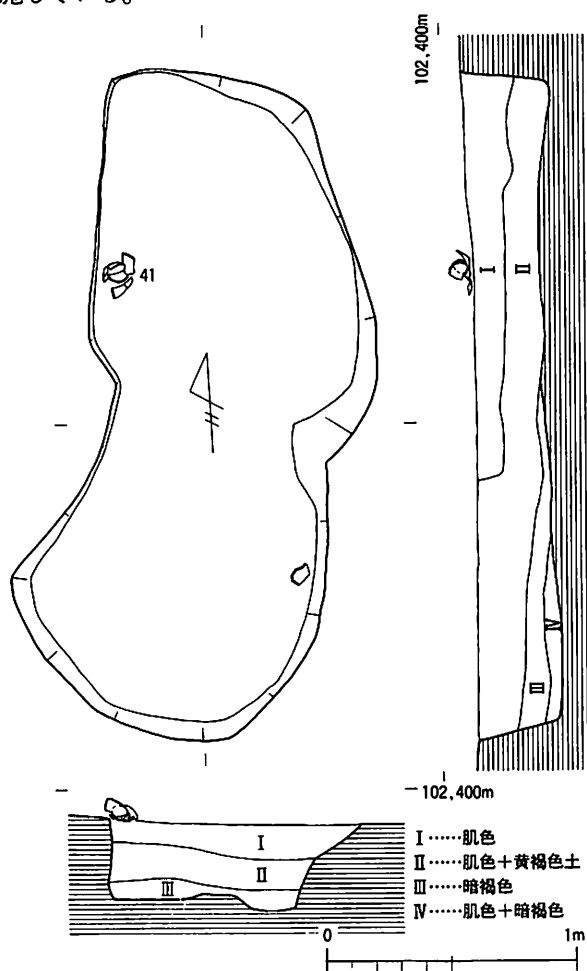
(4)5号不定形土壌(SX-05)(第13図)

長方形の中央部をややくぼめたような形状を呈する。東西1.00～1.30m、南北2.70m、深さ約0.3m。他の遺構と異なり、埋土中に焼土を含まず、地山の土を多量に含んでいる。

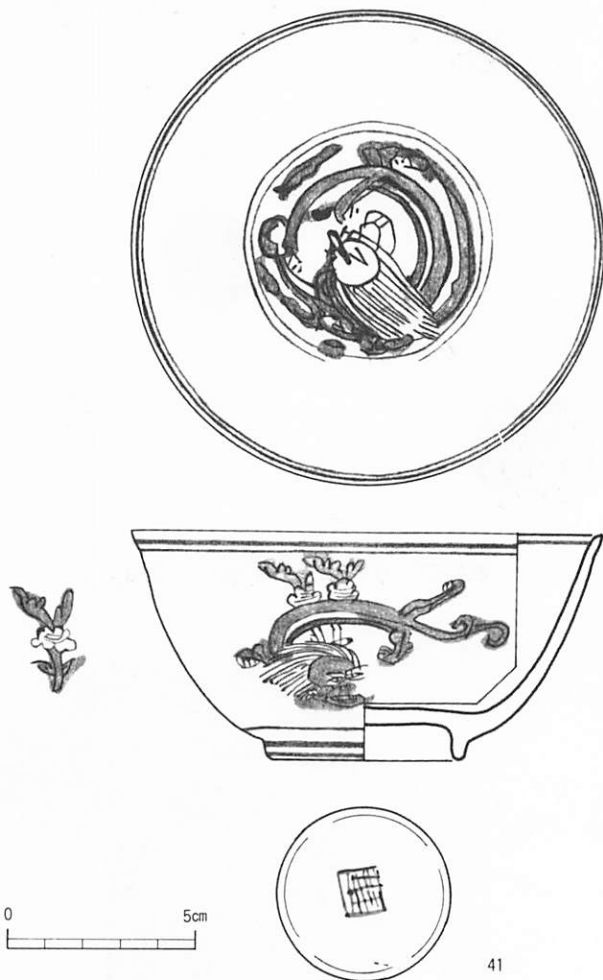
遺物は、土壌ライン確認中に染付碗のほぼ完形品などが出土。

○遺物(第14図)

41は染付碗である。口径12.5cm、器高6.0cm、底径5.2cm、高台高0.9cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がり口縁部ではやや外傾している。ヘラ削りされた畳付部分以外は、淡青白色の釉がかかり、体部外面には蚊龍文と花文を交互に2個ずつ、見込み部にも蚊龍文を、また高台内側にも何かの記号と思われるようなものが描かれている。中国製で16世紀のものと思われる。



第13図 5号不定形土壌(SX-05)実測図



第14図 5号不定形土壌出土遺物実測図

7.6cm、器高2.0cm、底径5.0cmの皿である。底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁部に至る。底部と体部の境は、はっきりしている。糸切り底。45は器高 3.0cmの皿である。体部は底部から直線的に立ち上がり、口縁部に至る。口縁部はやや外傾し、うすくなっていく。底部は糸切り底と思われる。46は器高2.1cmの皿である。底部からやや内湾気味に体部が立ち上がり、口縁部に近づくにつれて肥厚する。47は皿で口縁部近くが欠損し、器高は不明。底部から直線的に立ち上がり、その境ははっきりしている。糸切り底。

(6) 1号溝状遺構 (SD-01)

調査区の北側隅を東西に約4.5m 走り、SD-02と直交する。西から東方向に傾斜しており、その差は64cmを測る。

遺物は土師質土器・播鉢など出土。

○遺物 (第16図)

(5) 7号不定形土壌 (SX-07) 出土遺物 (第15図)

42は青磁碗の高台部分である。両面及び高台内側の一部にも淡緑青色の釉がかかっている。畳付部だけは削られており、釉はかかっていない。見込み部には、ヘラ描きによる花文が描かれている。中国製で底径4.2cm。

43～47は土師質土器である。43は口径 6.3cm、器高 1.5～1.9cm、底径3.9cm。底部からやや内湾気味に立ち上がり、口縁部に至る。片側の口縁部が内側に曲げられており、対面する側も破損していて断定はできないが、よく観察してみると、こちらも内側に曲げていたように思われる。44は口径

48は鉄製品である。器種ははっきりしないが、刀子のようにも思える。

49は土師質土器で、口径7.1cm、器高1.8～2.2cm、底径4.5cmの皿である。底部からやや内湾しながら立ち上がり、口縁に至る。

50は須恵質の播鉢で、底径13.8cmを測る。体部・底部の内面に7本単位の条線を施す。

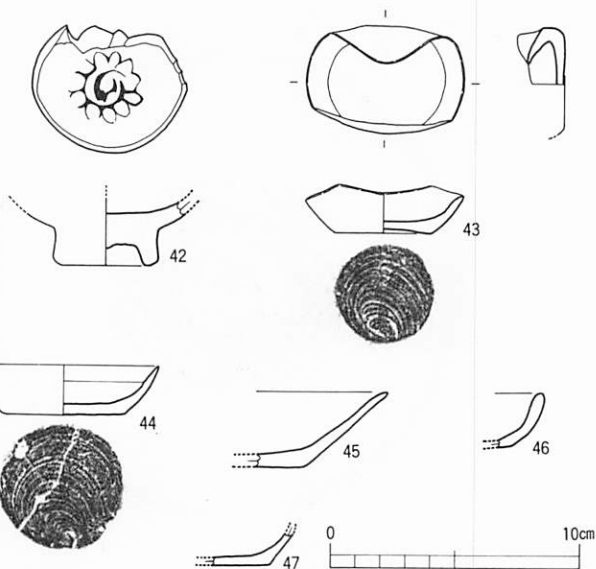
(7)2号溝状遺構 (SD-02)

(第18図)

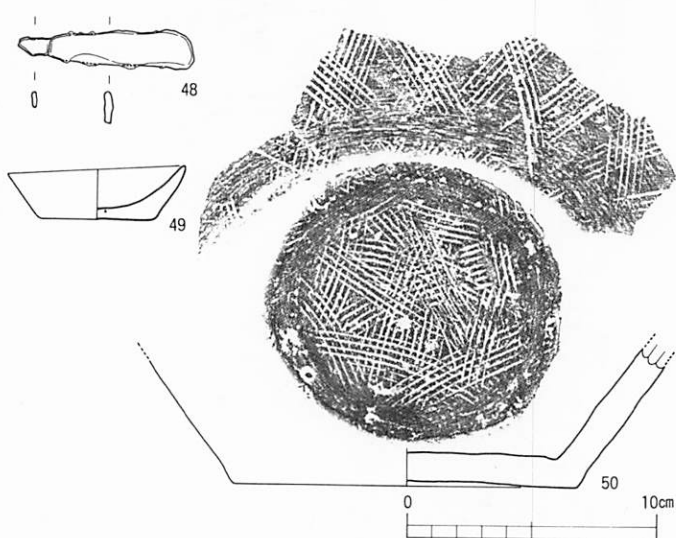
調査終了間際に、地山ラインの落ち込み部を確認するためⅠトレンチを設けたところ、幅1.78m、深さ0.6mの溝を確認。さらに、延長方向を確認するためⅡトレンチを設けると幅1.70m、深さ0.4mとなっていて続いていた。断面を観察してみると、下部は自然堆積と思われるが、上部になると人為的に埋められたように思われる。その結果、今回の検出遺構より一時期古い遺構と考えられる。

(8)遺構に伴わない遺物 (第17図)

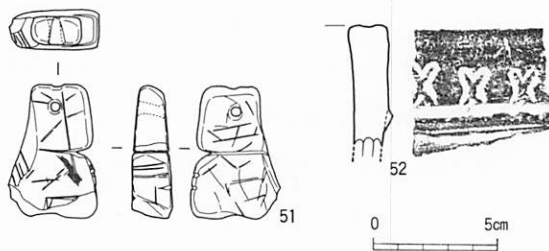
51は滑石製のペンダント状石器で、縦5.3cm、横3.5cm、厚さ1.6cmを測り、径0.6cmの孔をあけている。頭頂部にも半円形の溝がみられる。全体に擦り傷様の痕跡があり、中央部は片側から深く削り込まれている。



第15図 7号不定形土壌出土遺物実測図

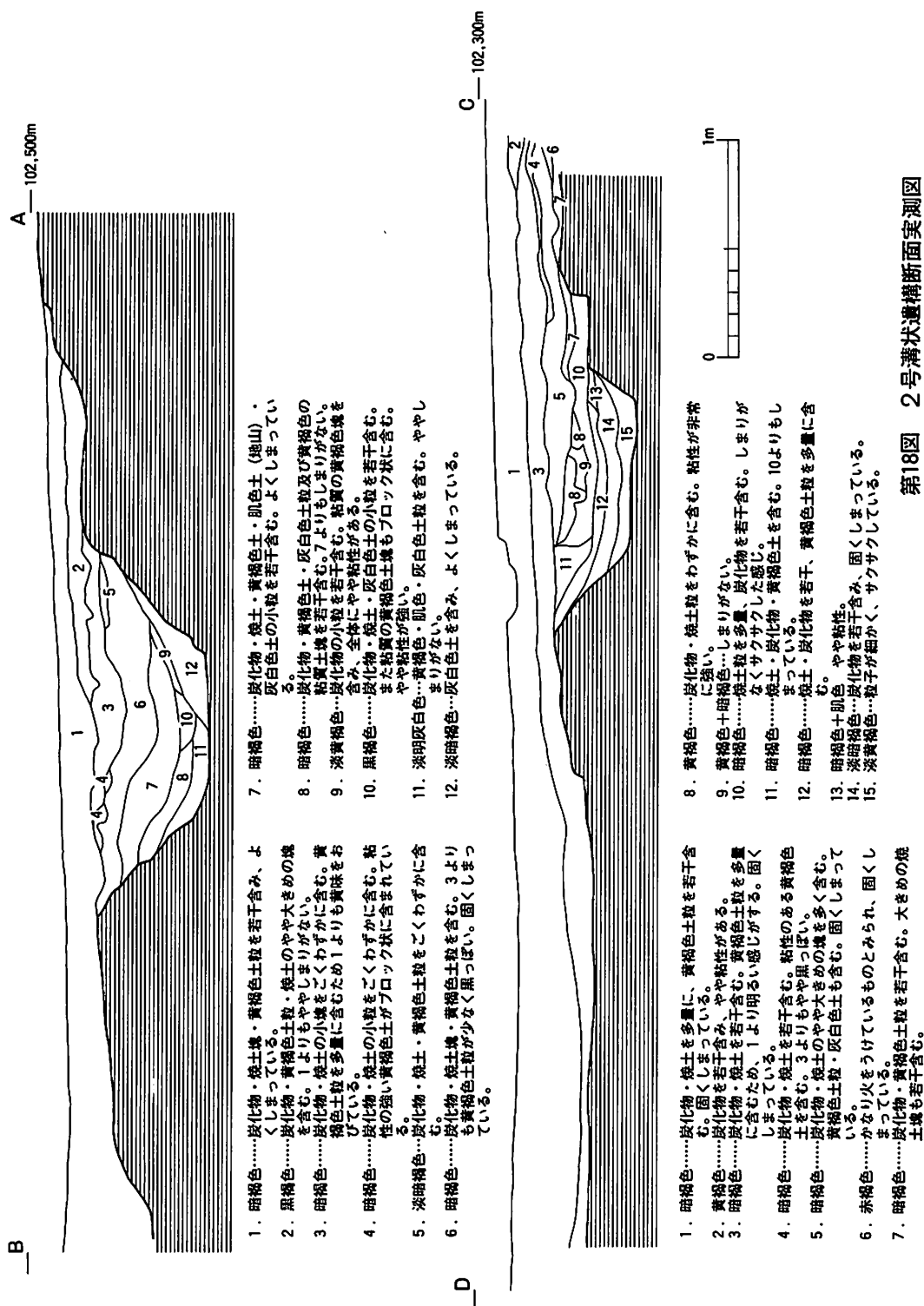


第16図 1号溝状遺構出土遺物実測図



第17図 遺構に伴わない遺物

52は瓦質の火舎の口縁部で、口縁と断面三角形の突帯間にX状の刻印を施している。



第18图 2号薄状遗構断面実測図

第Ⅲ章 ま と め

61・62年度の2ヶ年で主郭部分の調査を終え、本年度は主郭より1～1.5m下がったところに作られた平坦部の一部（西を除く三方に巡らされ、現在は五筆の畑に分かれている）の調査を行なった。南部にある栗畑から以前多量の焼米や石臼などが出土しており、今回の調査区がその隣接地であるため、これらと関連した倉庫などの施設が現われるのではないかとの予想のもとに調査を開始した。しかし、予想ははずれ、倉庫はおろか主郭部から検出された掘立柱建物も一棟も検出されなかった。

今回の調査で検出された遺構は、土塋1基・不定形土塋9基・溝状遺構2本と若干の柱穴である。土塋は1.93×0.88m、深さ0.47mの長方形プランを呈しており、内部には多量の焼土が堆積し、多くの遺物が出土した。しかし、その性格については確証を得るには至らなかった。不定形土塋は表面ではっきりとプランを確認できず、焼土の範囲で一応のプランとし調査にとりかかったものもある。SX-01～03はその例で、調査を進めるに従い結局は一つの土塋となってしまった。内部にはガチガチに固まった焼土層がみられ、青磁・備前焼など多量の遺物が出土した。また鉄クズも割に多く検出され、簡単な小鍛冶でも行っていた可能性も考えられるが、フイゴなど、これを実証する遺物の出土がみられず、確証は得られなかった。

当初、調査区の西側約3分の1でしか地山が確認できず、あとの3分の2は築城、あるいは攻城時に整地したものと考え、調査終了間際にその落ち込み具合を確認するためⅠトレンチをいれたところ、幅1.78m、深さ0.6mの溝を確認した。その規模から考えて空堀と判断、延長を確認するため、中央部にⅡトレンチをいれると幅1.70m、深さ0.4mと小さくなり、結局は溝状遺構として扱うことにした。しかし、この溝の確認により今回の調査で確認された遺構は、この溝を埋めて整地したあとに作られたことは事実であり、今年度の調査区も二時期の田中城があったことを実証づけたといえる。

出土遺物は調査面積が狭かったわりには多く、土師質土器・青磁・白磁・染付碗・備前焼・播鉢・火舎・金属製品・石製品・土製品などバラエティーにとんでいた。特に、金属製品は刀子のほか鎧の小札・冑の前立・鉄砲の玉などが出土し、当時の戦闘状態を、また、復元可能な青磁・白磁、ほぼ完形品の蚊龍文を描いた染付碗・火舎・播鉢などからは日常生活の様子を推測でき、貴重な資料となることだろう。遺物の多くは、16世紀のものと思われる。

来年度は空堀の調査を予定しており、さらに田中城の解明が進められることになるう。



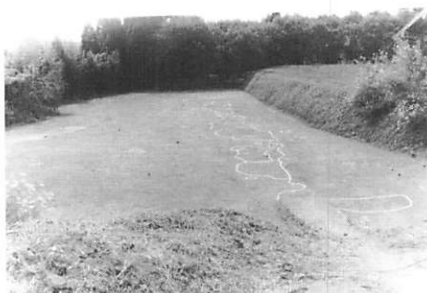
(1) 遠 景 (和仁川より臨む)



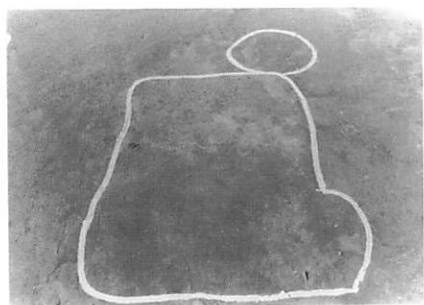
(2) 遠 景 (北西より)



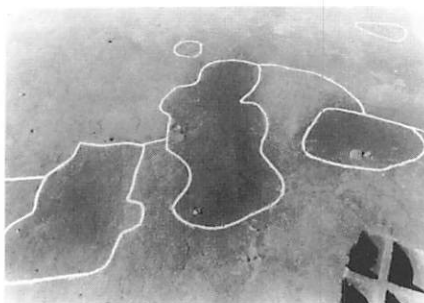
(1) 遺構検出状態 (南西より)



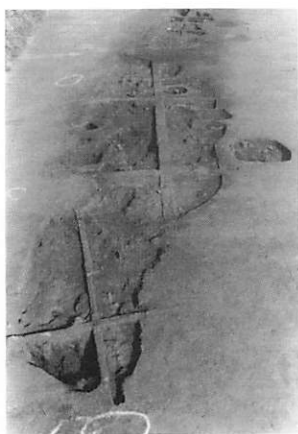
(2) 遺構検出状態 (北より)



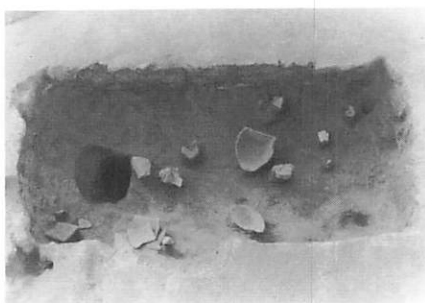
(3) SK-01 検出状態



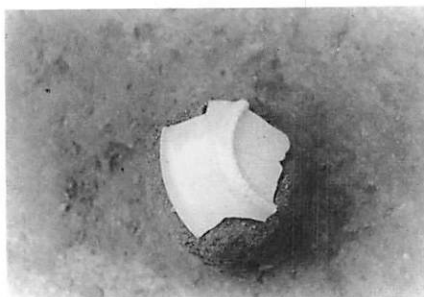
(4) SX-06~08 検出状態



(5) SX-01~03



(6) SK-01 遺物出土状態



(7) SK-01 青磁出土状態



(1) SX-02 土製猿出土状態



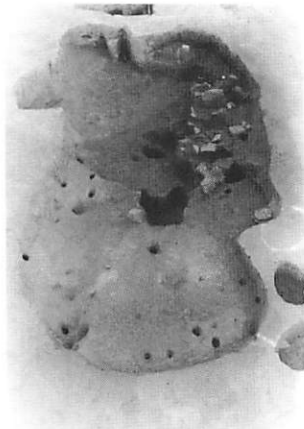
(2) SX-02 鞋出土状態



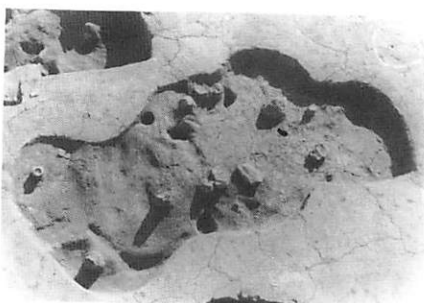
(3) SX-02 鉄砲玉出土状態



(4) SX-01 土師質土器出土状態



(5) SX-01



(7) SX-07



(6) SX-01 遺物出土状態



(8) SX-07 遺物出土状態



(1) SX-04



(2) SX-04 播鉢出土状態



(3) SX-04 鎧の小札出土状態



(4) SX-04 冑の前立・鎧の小札出土状態



(5) SX-04 刀子出土状態



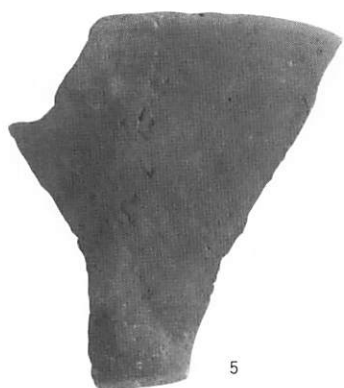
(6) SX-05 染付碗出土状態



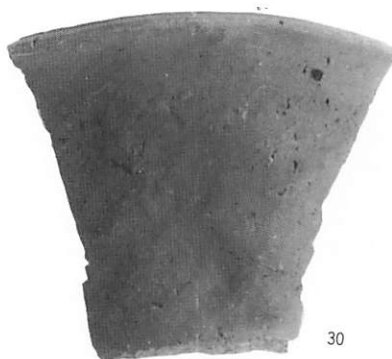
(7) ペンダント状石器出土状態



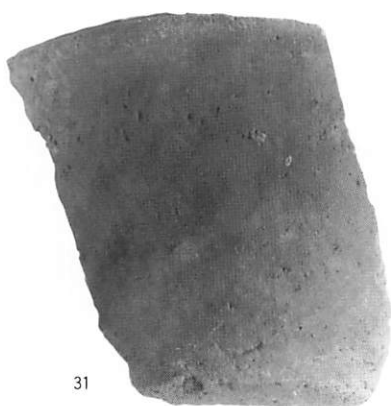
(8) 青磁出土状態



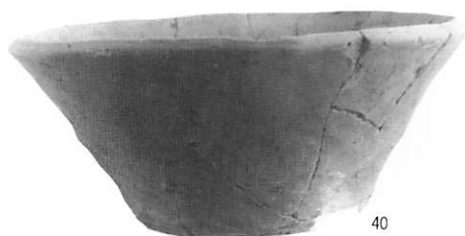
5



30



31



40



7



50

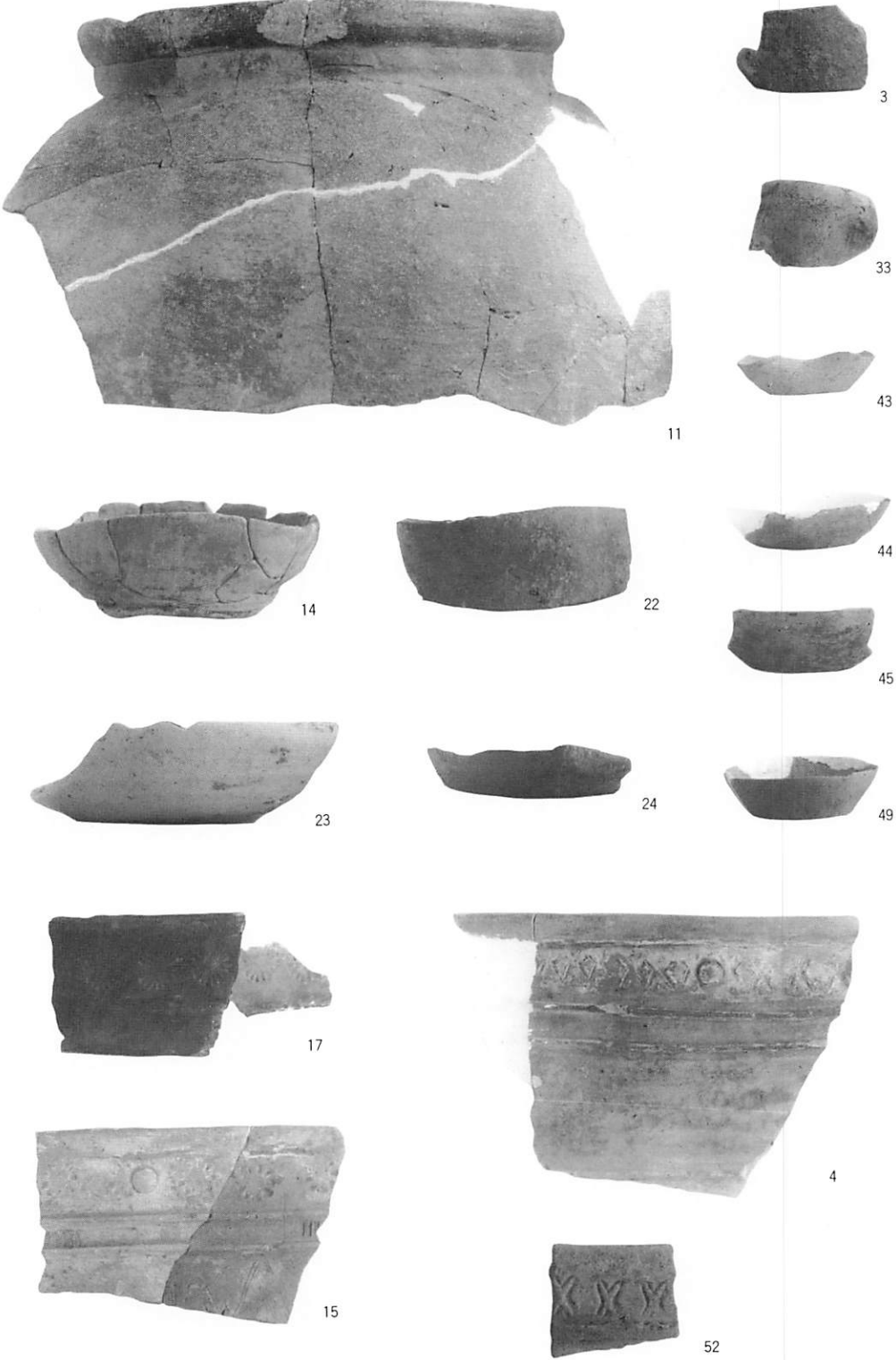


29

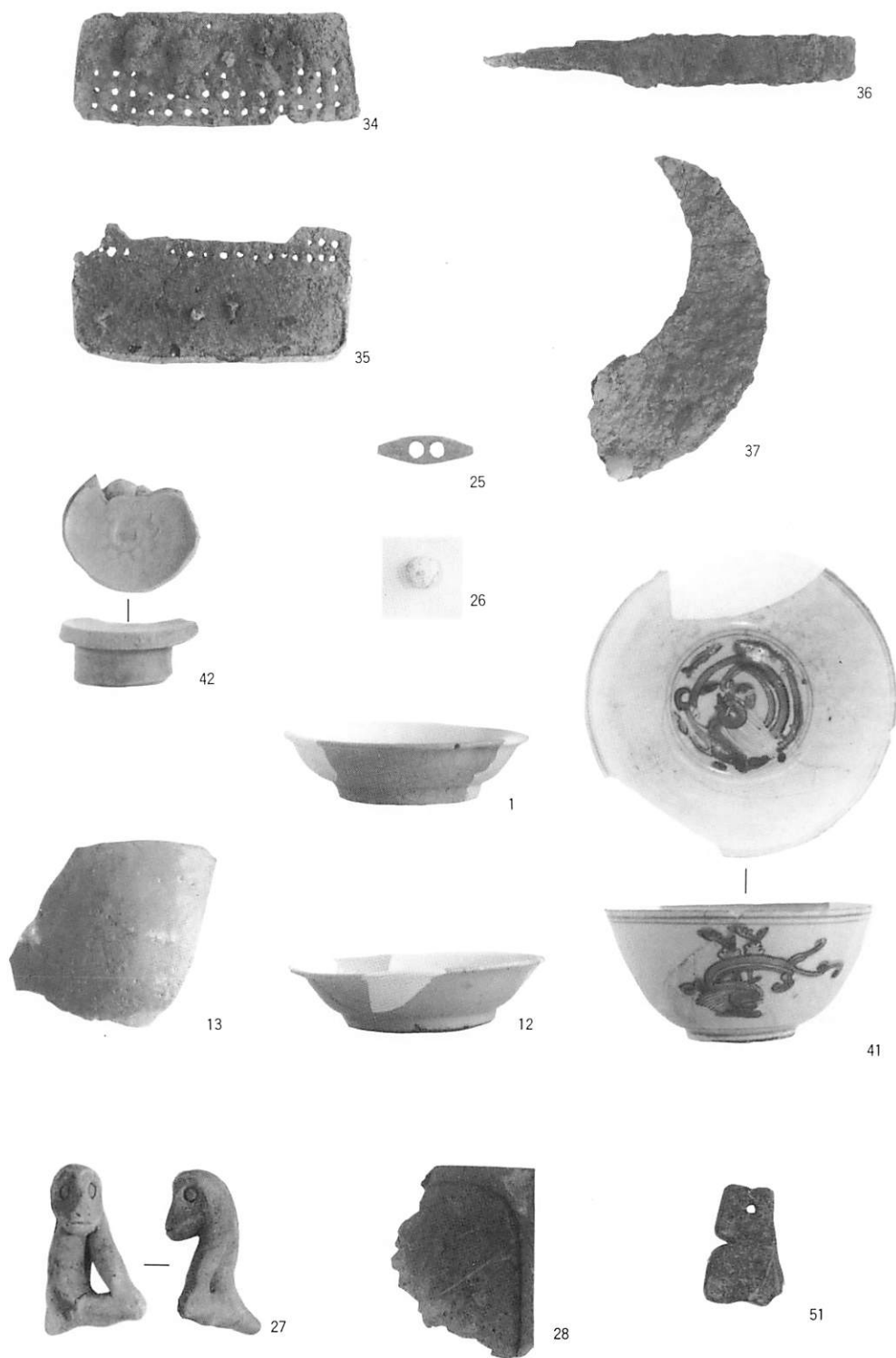


8

出土遺物



出土遺物



出土遺物

三加和町文化財調査報告 第3集

田 中 城 跡 Ⅲ

1989年3月31日

発行 三加和町教育委員会

〒861-09

熊本県玉名郡三加和町板楠90

印刷 (株) 城野印刷所

〒861-22

熊本県上益城郡益城町広崎1630-1(産業団地内)

